

●春日部市民文化講座（第4回） 「千利休のわび茶 ～その4 一利休の弟子たち～」

◆日時：2013年1月30日(水) 11時（ぼぼら春日部6階会議室）～12時

■蒲生氏郷の出生

「千利休のわび茶」をさぐる話も4回目の今日は利休の弟子たちの中から**蒲生氏郷**をお話します。蒲生氏郷のことを研究していくと、**利休の弟子で茶人であり、勇猛果敢な武将であり、キリシタン大名である**ということ以外には小説家もよく分からないと言われていています。蒲生氏郷が何を求めて生き、その生き様の中で何を表現しようとしていたのかが分からないのです。でも、DNAは変わらないのではないかと思います。蒲生氏郷のDNAは、出身の近江の国、日野城にあると思います。近江というと近江商人で、その中でも日野は日野商人と呼ばれて全国各地で造り酒屋などをやっている家が多いのですね。近江商人は全国に行商に出て、全国ネットを持って仕事をしていた。そして何よりも結束の強い集団なのです。

■蒲生氏郷の武将としての歩み

蒲生氏郷は、戦国の波にみごとなまでに乗って活躍した武将です。蒲生氏は近江蒲生郡日野に、公家を守っていた六角氏の重臣であった蒲生賢秀の嫡男として生まれます(弘治2年、1556年)。六角氏は織田信長によって滅ぼされ追放されます(永禄11年、1568年、氏郷12歳)。その時、父賢秀は織田軍に臣従して、信長の配下になります。そして、この時に賢秀は氏郷(幼名・鶴千代)を人質として岐阜に送ります。そして、13歳で元服し、同年14歳で信長の娘・冬姫と結婚します。そして、信長に従軍してさまざまな戦いで勇猛果敢に闘います。そんな時、天正10年(1582年、26歳)に本能寺の変が起こりました。その時、氏郷は父が守る日野城に信長の側室や子女を安土城から移して守ります。秀吉の時代になり、氏郷は秀吉に仕えて伊勢松ヶ島12万石を与えられます(天正12年、1584年)。そして翌年、松坂城の築城を開始し、秀吉から「羽柴」姓を与えられ、その後、松坂城へ移ります(天正16年、1588年)。さらに秀吉の小田原の陣に参陣し、その年に会津42万石へ移封されます(天正18年、1590年)。翌年には伊達領の一部も加増され92万石の大名となります。秀吉の朝鮮出兵(文禄の役)にも参陣し、名護屋の陣中で下血し(文禄2年、1593年)、会津若松に一時帰るが、伏見屋敷に出て没します(文禄4年、1595年、40歳)。

■蒲生氏郷を一番とす

表千家所蔵の『江岑宗左茶書』は、利休から数えて四代目、利休一少庵一宗旦一江岑宗左で四代目の家元による覚え書きです。この資料の中で、「利休の弟子七人衆と申は、一番に**蒲生飛騨守(氏郷)**、二～高山右近、南坊之事、三～細川越中守(忠興)、三斎之事、四～芝山監物(けんもつ)殿、五～瀬田掃部殿、六～牧村兵部大夫殿、七～古田織部殿、此内、織部一茶之湯能無御座候、併後にはふへん世に勝申候」とあり、蒲生氏郷を七人衆の筆頭に置いています。そんなエピソードを語る資料として、本日、ここに掛けている軸(写真)があります。この手紙で重要なのは、**千利休が蒲生氏郷に宛てたものでありながら、高山右近のことについて触れている**ことでもあります。実は、高山右近の資料はほとんどが無くなっているのですが、こうして利休や他の武将との資料から類推することができるのです。この菊月が何年なのかというと、氏郷が伊勢侍従であって、城ができた頃ということなどをつなぎ合わせると天正16年(1588年)9月22日ということとなり、氏郷が松ヶ島から松坂へ居城を移した時となります。そして、この大仏とは方広寺の大仏で、この鐘の「国家安康」「君臣豊楽」の句が豊臣を滅亡に導いたのですが…。



■千家と蒲生氏郷

利休の手紙に氏郷の名前が出てくるのは、天正8年で本能寺の変(天正10年6月2日)の2年前です。ですから、氏郷と利休が師弟関係にあったのは、この頃からと思われま



る理由は、**氏郷と徳川家康が千家の断絶を救ったことが大きい**と考えます。まず、天正19年(1591年)の利休断罪後は、利休の次男の少庵を会津にかくまっています。また、文禄3年11月(氏郷の没前年)には徳川家康との連名での『**少庵召出状**』(写真)といわれる書状があります。これは、秀吉の許しが出たので、すぐに都に帰ってくるようにという呼び出し状であり、今日も表千家家元に伝わっています。氏郷は、利休のわび茶を絶やすことがないようにと、秀吉に命がけの嘆願を行い、少庵を都に出仕させ、千家二代目の宗匠としたのです。そうしたことが、少庵の子であった千宗旦の言葉として残され、四代目・江岑宗左が宗旦から聞いた話として『茶書』に残されたものだと考えます。

郷は、利休のわび茶を絶やすことがないようにと、秀吉に命がけの嘆願を行い、少庵を都に出仕させ、千家二代目の宗匠としたのです。そうしたことが、少庵の子であった千宗旦の言葉として残され、四代目・江岑宗左が宗旦から聞いた話として『茶書』に残されたものだと考えます。

■キリシタンとしての洗礼

蒲生氏郷は、勇猛果敢な武将であり織田信長の天下統一に向けたデビュー戦の頃から、信長につき戦場を駆け巡ります。そして、近江商人として安土城での楽市楽座に大いに力を発揮しました。そんな城下町における楽市楽座を伊勢松坂、さらに会津でのまちづくりでも展開します。会津は現在、会津若松と呼ばれますが、会津に若松が付いたのは、氏郷が日野の松林を忍んで若松を付けたと言われています。その氏郷が天正13年(1585年)、大坂の南蛮寺で、高山右近の指導でキリシタンとなり洗礼を受けます。洗礼名は「レオン」といい、当時の教皇の名前を授けられたのです。高山右近の資料が少ないように、蒲生氏郷についてもキリシタンとしての話は少ないのですが、宣教師のルイス・フロイスの書簡では、氏郷をレオン氏郷殿とか、飛騨守(ひだのかみ)殿と記して、その頃の様子を仔細に書いています。その記録の中で注目すべきは、右近が、氏郷から終始目を離さなかったと繰り返し記していることです。右近は、飛騨守氏郷を何とかしてキリシタンに導こうと、さまざまな苦心をしていたのです。当時の戦場は、毎日戦っていたわけではなく、戦の合間に茶会があり、そうして中で右近は積極的に布教していたのです。最初の頃は、キリシタンに対して全く関心を示さず、こうした右近の態度を快く思っていなかった氏郷だったのですが、右近と宣教師たちの祈りが聞き届けられて、自ら説教を聴きたいと関心を示すようになります。フロイスは、語る右近よりも聴く氏郷のほうがより熱心であったと記録しています。洗礼を受けてからは、統治している伊勢をキリシタンの国にしようとして、会津でもキリシタンへの改宗を奨め、領民の1/3がキリシタンになったと記録されています。

■氏郷の生き様にみる信仰

文禄2年(1593年)、氏郷は秀吉軍に従って朝鮮半島を攻めるために九州の名護屋城(現在の佐賀県唐津市)に出陣します。近年、さまざまな発掘が行われており、名護屋城における氏郷の陣跡もありました。しかし、右近の陣跡はありません。それは天正15年(1587年)に秀吉によるバテレン追放令が出され、改宗をしなかった右近は領地を没収されて追放されてしまい、その翌年、前田利家の客将という形で名護屋城に来ていたからなのです。名護屋城における利休の茶会でも、氏郷や右近の名前があります。名護屋城に来た氏郷ですが、下血してしまい、秀吉と一緒に京都に帰ることになります。翌年2月、氏郷は会津を出発して京都伏見の屋敷に留まります。秀吉の見舞いなどを受けるのですが、秋口から病状が悪化して、翌年の文禄4年(1595年)2月7日に、右近に看取られながら40歳の若さで亡くなりました。右近は病床の氏郷に付き添うようにして見舞っています。それは、氏郷が熱心なキリシタンであったにもかかわらず、秀吉のキリシタン禁止令が出された時に、彼の信仰が揺らぎ、すっかり熱意が冷めてしまったのです。そうした氏郷の信仰を回復させて天国に召されるようにと付き添ったのです。そして、臨終の床で、氏郷は罪を悔い改め、主に赦しを請い祈って、永遠の祝福の中に入られたとルイス・フロイスは記録しています。こうした氏郷の信仰はどこから来ているのか…。文武両道に秀でており、武将の中の武将であり、歌にも茶の湯にも秀でていた氏郷がどうして熱心なキリシタンになったのか…。秀吉は、みんなが仕合わせになるためには、経済が豊かになり、文化が栄えることだろうと考え聚楽亭を造ります。人々に楽しみを与える館です。氏郷も同じように考え、その方向に向かったのですが、「心が渇き」きっていた。そこに、秀吉との違いがあったのかも知れません。当時の武将の誰もが持っていたのが「心の渇き」ではないかと思います。だから、みんなが茶室に会して茶を飲む。数日前までの敵味方が一堂に並んで、信頼し合って茶を喫すのです。家族が揃って茶漬けをすすることができること、そんなことが幸せではないでしょうか。今の時代で考えると、市民の幸せを考え、文化的な市になること、人々の交流が盛んで人々の心が繋がるのが幸せではないでしょうか。こうした武将たちの「心の渇き」を潤すものとして、そこにはキリシタンの信仰があり、さらに茶の湯があったのだと思います。

■氏郷の生涯から見えてくる利休のわび茶

氏郷はこうした「心の渇き」を持っていた。幸福とは何だろうか…。ということを常に考えていた。そして、死の床にあった氏郷は、右近の導きにより信仰を取り戻すことができ天国へと召されていきました。氏郷の辞世の句は、「限りあれば 吹かねど花は 散るものを 心短き 春の山風」というものです。まだやりたいことが多く、生きたいという気持ちを読み取れます。そんな氏郷を右近が看取りました。千利休も、こうした「心の渇き」に対して向き合い、それを潤そうとしていたのです。茶の湯というハレの舞台に立って、その最初に炭点前という自分の死の儀式を持ち込んでいるのです。利休は長次郎に土器のような茶碗を焼かせます。焼成温度は約850度と言われています。その温度はまさに土器を焼く温度であり、私たちが最後を迎えた時に焼かれる温度でもあります。それ以上では灰だけになってしまい骨格が残りません。ちょうど良い温度が土器の焼かれる温度なのです。炭点前から始まる茶会では私の心を飲んで食べて分かってください…。と伝えたのです。これが千利休の「わびの極め」であると思います。

この回は利休七哲の一茶人であり、勇猛果敢な武将であり、キリシタン大名であった蒲生氏郷のお話でした。